

## 福知山公立大学 2019年度 入学式 式辞

本日、福知山公立大学に入学されたみなさん、おめでとうございます。本学の教職員をはじめここで働き学ぶすべての者たちを代表して、みなさんを新たな仲間として心から歓迎します。

ご家族ご親族の方々にもお慶びを申し上げます。また、福知山市長大橋一夫様をはじめ、ご来賓各位に厚く御礼申し上げます。開式に当たり、本学学歌と応援歌で入学生たちにお祝いと励ましをくださいました、福知山混声合唱団の方々はこの場をお借りして心からお礼申し上げます。新入生のみなさんはこのように地域の多くの方々祝福され、迎えられていることを心にとめておいてください。

さて、みなさん、つい先日新しい元号が発表され、世間では新しい時代の幕開けを告げるかのように喧伝されています。しかし、元号が変わると新しい時代が始まるという歴史感覚や時代観は日本人だけのものです。古代の帝王が空間だけでなく時間まで支配するという思想に基づく元号制は、明治維新と同時に一世一元制の制度となって今日にいたったものです。皇位の継承自体が時代の転換と直結する訳ではありません。

ただ、日本では偶然ですが、「明治」から「大正」への転換が、世界と日本の歴史の大きな転換点と重なっていました。「大正」は、日本の民衆が国会の周りを取り囲んで時の内閣を辞職に追い込む「大正政変」で始まり、すぐに第一次世界大戦が起こり、その終結とともに世界的なデモクラシーの潮流が強まり、いわゆる「大正デモクラシー」の時代を迎えました。「大正」から「昭和」へと移った時期は、1927年（昭和2年）の金融恐慌から1929年の世界大恐慌につながり、やがては戦争の時代に突き進んでいく時代の始まりと重なっていました。「昭和」から「平成」への転換の年（1989年）には、ベルリンの壁が崩壊し、世界の冷戦体制が終末を迎え、国内的にはバブル経済の崩壊や、1955年に始まる自由民主党と日本社会党の二大政党を中心とした政党政治運営の仕組み（いわゆる55年体制）が崩れるのと重なっていました。

では、今回の「平成」から「令和」への転換は世界のどんな新しい時代への転換と重なっているのでしょうか。

昨年、米朝会談にはじまった東アジア世界の新しい動きも一進一退でまだ先が見えません。日本と隣国（中国、韓国、北朝鮮）との関係も複雑です。ヨーロッパ世界でもイギリスのEU離脱の動向も混沌としています。国内的には憲法問題もあります。世界と日本の動向が見定めにくい時期に私たちは差し掛かっています。そんな中で元号の転換を新しい時代の開幕に重ねることができるかどうかは私たちが何を選択し、どう行動していくかにかかっています。

いまから、100年前の1919年4月という時期は、32カ国が参加して1月にパリで始まった第一次世界大戦の講和会議が、大国の利害の調整が困難をきわめたため、一部の軍人などが平和の会議は崩壊するときに言い、再び大戦が続きかねない危機にさらされていた時期でした。しかし、世界は努力して難関を克服し、国際的な平和機構として国際連盟を創りあげるヴェルサイユ条約を6月に調印し、翌年1月に国際連盟が発足しました。

いま、東アジア世界に新たな平和の国際社会を築き上げ得るかどうかはまだ見えていませんが、わずかながら動きは始まっています。どんな難関をも乗り越えて、この営みを成功させようとする努力こそが、新しい時代の始まりを告げ得るのだと私は思います。そうなれば、「平成」から「令和」への元号の転換は新しい時代の開幕を告げることと重なってくるのだと言えます。つまり、新しい時代の開幕は私たちとみなさんの課題なのです。

私たちの大学は、市民の大学・地域のための大学・世界とともに歩む大学という基本理念のもとに、地域の人々とともに学びあう地域協働型の教育研究を特色としています。みなさんはその学びの中で多くの知識や技能を身につけていかねばなりません。それはこのローカルな実践的学びから世界を視野に活動していく担い手になることを目指してください。世界の動きにも目を向け、新しい時代を切り開く力を身につけていってください。

みなさんが、世界とともに歩む大学の一員となって大きく成長してくれることを期待して、みなさんを迎える式辞とします。さあ、共に歩み始めましょう。

2019年4月3日

福知山公立大学学長 井口和起